

協議会への期待(1)

— 聖霊体験の証を —

日本キリスト教団新松戸教会牧師

津村友昭



伝道の為に、あちこちを訪れ、耳にすることは、聖霊体験をしたが、それを語ると教会に問題や混乱が起るるので、それは心の内にとどめていると言う信徒と牧師の声であった。確かに証すると波風は立つてあるが、しかしそれで良いのであるうかと考えさせられる。聖書に根ざした聖霊体験を、個人的経験として語ることなくして伝道はこの国に浸透するであろうかと考える。春にシリアを訪ね、パウロが改心したコーカブの丘に立った時、ここでパウロは聖霊体験を経験する、それを契機として、伝道がなされて行ったのだと痛感した、あの体験を使徒言行録には三度に渡って語っている。活けるイエスに出会い、馬から落ちて倒れた彼は、今までの古い自分に死に新しい人に変えられた、またアナニヤに祈ってもらった時、目から鱗が落ちたと。その新しい体験を証したパウロの激しさに人々はうるたえたと語られている。またパウロに出会いは、火あぶりや野獣の迫害から守ら

れたと。今日もテクラの修道院として続いているこの地方だけに、アラム語がつかわれている。テクラのことは外典のパウロ行伝に記されている。聖霊体験なくして使徒たちの伝道はなかつたと思う時、大胆に聖霊体験を証する場、時を持って励ましあう必要性を感じる。「聖霊が臨むとき、あなた方は力を受けるであろう、そして私の証人となるであろう」と言われている。神から力を受ける特権と共に、証人となるであろうと言う責任があることを思う。この協議会がその証の場となることが出来るようにと願う。

霊の戦いとしての祈りの家庭を

今日サタンがアダムとイブの平和な家庭をいざなつたように、様々な問題を家庭が抱えてしまっている。その家庭がサタンから解放されて回復されることを願っているが、家庭の中がキリストの愛の証の場として実践される時、信仰の実をみる。神が家庭を創造されたのは霊的戦いの拠点として魂を成長させ、霊の戦い

を通して成長し、サタンに勝利し、神に栄光を帰するためである。

教会を支える家族が生き生きとされる時、共同体としての教会も命に満ちてくる。そのためにまず家庭礼拝がなされ、祈りの時が必要であり、祈りのネット・ワークをつくり、メールで配信して祈りの課題を挙げ励ましあえるならと思う。また家庭の中で経験した様々の出来事の情報交換を、場所は違ってもパソコンを通しての交流の場が与えられるなら願う。それは教派を超えて励まし合うことも出来るのではないか。一教会では得られにくい情報、子供の問題、心の病のこと、様々な交流の場が与えられることを願っている。この世の様々な情報は沢山入ってくるが、信仰の共同体としての情報は少ないと思われる。

日本の福音化を

今日神学校を出て任地を求めるとき、いくつかの問題点がある。まず無牧の教会が候補に挙がってくる。それは牧師と役員会との意見の違いでそうなっている場合が多い。また信徒数が少なく迎えられるにくい場合がある。両方とも地方教会に多くみられる。そのような困難な場所の教会では、神学校を出たばかりの新任牧師では乗り切りにくい。また、その地方の因習が今でも生きている場でもある。伝道の最前線と言っても

過言ではない、人々が集まる都市周辺では比較的開拓伝道がなされやすいが、地方教会は今ある教会もわれわれの教派では十年後五百の教会が無牧になっていくと言われている。

そこで規模の大きい教会と規模の小さい教会との交流と連帯を持つことが急務である。また教派を超えて伝道体制を整える時がきている。それは都市と地方との連帯でもある。規模の小さい地方教会の牧師を招いて、その教会の現状を聞いて学ぶことによって、その地方の問題や因習との戦いに連帯感を持つ、また規模の大きい教会の良さも地方の牧師も学ぶことが出来る。経験のあるベテラン牧師が地方に赴任して欲しいと思う。そうすることによって地方教会が活性化されることが出来る。規模の大きい教会は執事、役員も訓練を受けているので新任牧師を支え育てていけるのではないかと思う。この連帯感を持つことが出来なければ、地方教会は立ち消えていくであろう。それは日本を福音化するには困難と言わざるを得ない。有名な牧師のところには沢山の人々が集まってくることは望ましいが、同時に地方教会が活性化されることも急務であると言える。故に二十一世紀の伝道は超教派で、共に連帯感を持つと共に、祈り合って歩む時、明日の福音伝道があることと信じている。

協議会への期待(2)

日本民族復興の切り札として キリスト教宣教を展開すること

日之出キリスト教会牧師 行澤一人



① 従来日本におけるキリスト教宣教の飛躍的拡大のために、「リバイバル」という表現がしばしば用いられてきた。これは訳せば、信仰「復興」運動である。通常、この用語法を使う人々の念頭にあるのは、たとえば、十八世紀英国においてジョージ・ホイットフィールドやジョン・ウエズレーによって指導された信仰復興運動であり、あるいは十九世紀アメリカにおいて力強く展開されたいわゆる「天幕集会」式の辺境開拓（フロンティア）、D・ムーディー流の大衆伝道、そして二十世紀に至ってアメリカを震源としつつ、瞬く間に世界規模の運動となった（広い意味での）ペンテコステⅡカリスマ運動と、そこに見られる爆発的な大収穫、といったものである。しかし、これらのアングロⅡアメリカ圏（英語圏）における「リバイバル」とは、アングロⅡアメリカ的なプロテスタントイズムが一つ

の文明圏を形成するものとして、既に人々の文化的なアイデンティティを深いところで規定するまでになった社会を背景として起こってきたものである。確かに、当時、多くの人々の信仰は生き生きとした父祖たちのそれからは遠く離れて形骸化していたのであり、道徳的退廃も著しかった。そこに力強いリバイバルⅡ信仰「復興」運動が起これ、非常に多くの人々が悔い改めとともに生ける信仰へと「立ち返って」いった。しかし、ここで見られた信仰復興というのは、彼らが全く新しい精神風土としてのキリスト教に「改宗」したというようなものではない。より正確には、それは、潜在的に深い部分で当該文化圏に属する人々を規定しつつも、忘れ去られていた霊的アイデンティティが、顕在化し、露出し、「思い起こされた」ものであった。

したがって、このような背景に

おいて生起してきた「リバイバル」という概念を、現在の日本社会に適用もしくは類推し、私たちの目標とするというのは無理がある、あるいは次元の異なることであるといわざるを得ない。この点が十分理解されていないと、アングロⅡアメリカ的リバイバル運動において歴史的に見られた精神性や方法論を、時代も背景も文化も全く異なる今日の日本伝道に愚直にかつ無自覚的に当てはめてしまうことになる。

② 思うに、私たちの目標とすべきは、ちょうど、エルサレムに始まったユダヤ民族内の信仰復興としての「ナザレ派」運動が、ローマ社会に浸透していき、遂には「キリスト教」としてローマ社会を支えるに至った時代における宣教の展開であるべきである。全くギリシャ・ローマ的な神話と多神教に彩られた異教社会ローマがキリスト教化され、西ローマ帝国が滅んだ後も「ローマ帝国」はローマ教皇による戴冠によって保障されるまでになった。それほどに、キリスト教はローマ文明の核心となり得たのである。

日本のプロテスタント教会においては、コンスタンティヌス帝に始まる、この「ローマのキリスト

教化」という事態はすこぶる評価が低く、信仰の墮落そのものとさえ見られることがある。確かに、多くの重大な問題がそこにあったし、反ユダヤ主義という致命的な病理さえそこから生まれてきたことも忘れてはならない。しかし、その後のキリスト教の世界化・普遍化ということが、もっぱら文明の高低差を利用したローマ文明の流入という形で実現されてきたことも見逃せない反面の事実である。ヨーロッパ・キリスト教はその文明としての中心地を、ローマからスペイン、ポルトガル、ドイツ、イギリス、そしてアメリカへと移しながら、その都度、その時代の最高度の文明の波及という形で、世界へともたらされていったのである。その意味で、二十世紀のキリスト教は、アメリカ文明の普遍化と共にもたらされたといつて過言ではない。

③ では、「ローマのキリスト教化」という宣教プロセスから、私たちは何を学ぶべきなのか。結論から言えば、私たちは、そこに展開された「大胆な文脈化」のプロセスこそ、今学ぶべきだと思う。もちろん、キリスト教宣教は、使徒パウロの働きからして、それまでの異教的Ⅱ非ユダヤ的な文明（ヘレ

ニズム)との対決を含んでいた。多くの聖徒たちがローマによる苛烈な迫害の結果、殉教していった。それはまさに唯一まことの神のみを礼拝するというヘブライズムの精髓と、多神教的迷信及びヒューマニズムを体現していたヘレニズム文明とが衝突したからである。しかし、ローマ帝国は、何故そこまでむきになって迫害を加えたのだらうか？それは、ローマ帝国をかくまで畏怖させるほどにキリスト教が普及し、聖徒が増え広がったからである。特に、今までローマ帝国を支えていたエリート層にまで深くキリスト教が浸透していったことは帝国をおののかせた。

では、なぜ彼らローマのエリート層はキリスト教を受容し得たのか？それは、核心部分において決して妥協され得ないヘブライズム(唯一神信仰)が、「容器」としての文化においてはヘレニズムの形態を取って提示されたからである。あるいは、キリスト教信仰は、決してローマに敵対したり、これを滅ぼすものではなく、むしろその高い霊性と高潔な道徳性によって、腐敗したローマを再生させ、ローマを本来のローマたらしめるものとして理解され、受容されたからである。言い換えれば、ローマの文明的・民族的アイデンティティ

は、キリスト教によってこそ支えられ得るのだと彼らに自覚されたからである。

それは、従来ローマを牛耳っていた旧勢力に多神教的霊性との激しい衝突をもたらした。が、それはあくまでローマの正しいアイデンティティを真に守護し得るものは誰であるか、という霊的戦いであったのであり、外部からローマそのものを否定し、破壊しようという運動ではなかった。キリスト教は、ローマにとって、一方で霊的眞実のゆえに常に緊張関係を孕むものでありながら、他方で自らの国家としての統合を眞の意味で支える精神的原理ともなったのである。言い換えれば、ローマ文明の魂にヘブライズムが注入されると共に、そこで生まれたキリスト教は、ローマ化されたヘブライズムとなったのである。

④ 私は、このプロセスは、今日なお、異教的・多神教的精神性を背景とする文明圏に対するキリスト教宣教論として有効性を持っていると思う。たとえば、それは、既に韓国で起こったキリスト教の爆発的成長を見るとき明らかとなる。近代化への道程における民族的危機の中で、キリスト教が韓国の民族的アイデンティティを支え

る柱となり、韓国のキリスト教化が進められた。それは、同時に、キリスト教の韓国化とも言うべき文化形態を伴って進行したのである。

中国においてキリスト教化が進展する最近の状況を見ても、このことが良く理解される。共産主義と毛思想という特異な精神によって指導されたゆえに破綻と退廃を経験した中国において、すさまじい迫害を経験しつつも、漢民族のクリスチャンたちは、キリスト教こそ漢民族の危機を真に救うことのできる核心であることを証ししてきた。結果、今や、中国共産党内部に、そのエリート層にさえ、中国再生の核となるべきものとしてキリスト教が理解され、受容されつつある。かつて中国を食い尽くした西洋文明の核として憎悪の対象とされたキリスト教が、今や、漢民族の自信と誇りを支えるシンボルとなりつつあり、加えて世界宣教を担う主体としての大いなる使命感を漢民族に与えつつあるのである。

「今度こそ、日本の番だ」―私は心に深く確信している。キリスト教こそ、今、文明としての活力を著しく低下させ、精神性の底なしの退廃を経験しつつある日本を復興する切り札である。このメッ

セージは、必ず、「本物の日本人」の心を捉えると私は信じる。そのために、聖霊は、このメッセージを証しする容器として、「日本のキリスト教」というべき文化形態を私たちに与えてくださると信じているのである。もっとも、私たちが、日本民族のアイデンティティに触れるほどに文明の核心に迫っていくとき、迫害を覚悟せねばならない事態も来るだろう。しかし、ローマがキリスト教化されていくプロセスの中で、使徒教父の口にした次の言葉を私たちも覚えておきたい。「殉教者の血は種である」(テルトゥリアヌス)。

